

博士學位請求論文審査報告書

氏名：トラン・クオック・フォン〔愛知学院大学大学院文学研究科研究員〕

学位の種類：博士（文学）〔甲〕

論文の題目：天台智顛における三諦三観思想の研究

一、論文内容の特色と要旨

〔1〕本論文の特色

中国仏教を大成させた天台智顛（538－597）は、『法華玄義』『法華文句』『摩訶止観』において、すべての存在を把握するのに「空・仮・中」の三諦・三観思想の立場から捉え、すべての仏教思想を円融相即まで高揚させたのである。

本論文は、インド・中国において、本来は真諦・俗諦、世俗諦・第一義諦の「二諦」思想であったものを、なぜ、天台智顛は「三諦」思想に改変し体系化しなければならなかったのか。また、「三諦」思想とは何か等々を究明したものである。

具体的には、インドの2世紀頃に龍樹（ナーガールジュナ、150－250・100－200頃）が『中論』で説示した二諦から、中国の隋代（589－618）6世紀頃に天台智顛が説示した三諦に至るまで、約5世紀にわたる二諦説から三諦説への展開を緻密に究明されたものである。

研究方法は、基本的に経典や論書を根拠として、客観的な視点から経典や論書を読み込んでいっている。文献学的研究方法を用いて、教理や思想を正確に解明していったことは、本論文の大きな特徴である。

本論文において、天台智顛の前期時代の著書にみられる三諦三観思想が究明されているが、学会史上初めての研究成果である。また、『法華文句』における三諦三観思想の究明も画期的な研究成果である。

天台智顛の三諦三観思想といえば、『法華玄義』が最も重要であり、勿論究明されているが、筆者が、最終章に『摩訶止観』をもってきたことに重要な意義が認められる。まさに正確な把握の方法であると言わなければならない。

天台智顛が、「三諦・三観」思想を高揚したのは、理論としての円融・円頓思想ではなく、現象世界における真実としての三諦・三観の円融・円頓思想を実修することこそ重要な意義があることを明らかにされたのである。

本論文は、真正面から難解な「二諦」「三諦・三観」思想に取り組まれたものである。天台智顛の「三諦・三観」思想は、天台教学の根本であり、未解明の問題が山積している。真摯な研究態度で未解明の領域に足を踏み入れられ、一つ一つ着実に解明していかれたのが本論文である。

「二諦」「三諦・三観」思想の展開を、インドから中国の諸師・天台智顛への展開を体系的に究明された最初の研究成果として学会に一石を投じることになるであろう。

本論文の総ページ数は、690 ページ (52 字×22 行) であり、400 字詰め原稿用紙に換算すれば、1,973 ページに相当する大著である。

よくぞこれだけの大著を、一貫した緻密な研究方法を用いて執筆されたことこそ、本論文の最大の特徴がある。

〔2〕 本論文内容の要旨

第一篇の「大乘仏教における二諦思想の形成と展開」は、インドの龍樹の二諦説を龍樹の著書である『中論』と『大智度論』に究明された。

また、中国の魏晉時代 (250-420) から隋代 (589-618) に至る二諦説を、僧肇 (384-414?) の『肇論』、鳩摩羅什 (344-413・350-409)、釈道安 (312-385)、梁朝二十三家、開善寺智蔵 (458-522)、莊嚴寺僧旻 (467-527)、光宅寺法雲 (467-529)、龍光寺僧綽、淨影寺慧遠 (523-592)、吉蔵 (549-623) の『大乘玄論』『中觀論疏』『十二門論疏』『法華玄論』『二諦義』などを典拠として考察されている。

第二篇の「天台智顛における三諦三觀思想の所依経論」は、従来、二諦説であったものを、天台智顛は如何なる経論を根拠として三諦に体系づけたのかを究明したものである。とくに、その根拠として『仁王般若経』『菩薩瓔珞本業経』『法華玄義』『法華経』方便品を上げている。ただ問題なのは、『仁王般若経』『菩薩瓔珞本業経』は、中国で制作されたいわゆる疑偽經典であるので、問題は残るのである。

本命の第三篇の「天台智顛における三諦三觀思想の展開」は、天台智顛の前期時代と後期時代の著書にみる三諦・三觀思想を究明したものである。

まず、前期時代の著書として、『次第禪門』『法華三昧懺儀』『六妙法門』『覺意三昧』『方便三昧行法』『法界次第初門』『天台小止觀』に説かれる三諦・三觀思想を究明されている。

続いて、本命である後期時代の著書である『法華文句』『法華玄義』『摩訶止觀』に説かれる三諦・三觀思想は、本体の 3 分の 2 の 209~647 頁に究明されている。

とくに、『法華文句』の成立に関しては、平井俊栄氏の『法華文句の成立に関する研究』に対して、独自の持論を展開された上で、三諦・三觀思想が究明されている。今日まで学会において、『法華文句』の三諦・三觀思想に関して究明されていないので、貴重な研究成果となるものである。『法華文句』の三諦・三觀思想は、212~349 頁にわたっており、137 頁を費やして究明されている。

三諦・三觀思想を重要的に説かれた『法華玄義』は、351~492 頁に説かれ、141 頁を費やしている。

三諦・三觀思想の実践法門を説かれた『摩訶止觀』は、493~647 頁にわたっており、154 頁を費やしている。

とくに、『摩訶止觀』における三諦・三觀思想は、学会において十分研究しておらず、未解明の多くの問題を究明されている。

諸法実相・世間相常住・一念三千・十境十乘觀法・円頓・円融相即を説く天台智顛の根本教学は、即空即仮即中の三諦・一心三觀思想を根拠として成立したものである。天台教学において、「三諦・三觀」思想を究明することは、最も重要な課題であるということができる。先学によっても研究されてきたが、インド・中国において如何に「二諦」思想が成

立し展開したか、また、天台智顛が何故「三諦・三観」思想を確立したかを体系的に研究されたのは、本論文が最初であると言っても過言ではない。

二、審査結果の要旨

まず、全体的にいえることは、論を進めるに当たって、根拠となる經典や論書を正確に引用し、それに書き下し文を作成し、的確に解説・把握されていることは、高く評価される。学術論文としての体裁は、全体的に厳守され論が進められている。文献学的研究といっても、終始一貫して推敲していくことは、実に大変なことであるが、道に迷うことなく、見事にそれを実現され、当初の目的を達成されたことを評価したい。

第一篇の「大乘仏教における二諦思想の形成と展開」は、インドの龍樹における真と俗・世俗と勝義（第一義）の二諦思想が究明されている。『中論』『大智度論』を正確に引用し、的確に読み込まれ、龍樹は両論に提起した二諦は、「諸法皆空・諸法実相」を宣揚したものであるという結論を導き、新知見を提示されたのである。

中国の魏晋時代（250－420）においては、格義の時代を経て、正しい仏教思想を究明しようとする時代と相応して、二諦思想が究明されたのである。二諦思想は、インド伝来の正当な仏教思想として本格的に究明されたのである。とくに、僧肇は『肇論』において、龍樹系般若経学の空思想を根拠として、二諦思想を理解したことを解明された。

南北朝時代（420－598）においては、昭明太子の二十三家説の二諦説として『大般涅槃経』を根拠として、世人の所智を俗諦・出世人の所智を第一義諦とした。僧旻・智蔵・僧綽の成実論師は、それぞれの真俗二諦によって二諦不異相即説を、二諦即中道説を、二諦不離相即説を成立させた、という新知見を提示されたのである。

隋代（589－618）においては、とくに嘉祥大師吉蔵と天台大智智顛を取り上げられている。吉蔵は、龍樹系般若経学の思想を土台として四種二諦説を成立させた。吉蔵は、絶対的真理・真実在は「言亡慮絶」に帰着し「不三」であるので二諦とならなければならないことを明らかにした。智顛については、後に具体的に究明されることになるが、『法華経』の立場から蔵通別円の化法四教によって七種二諦説を成立させた、という新知見を提示されたことは評価される。

第二篇の「天台智顛における三諦三観思想の所依経論」は、インド仏教においては二諦説であったものを、天台智顛は何の経論を根拠として三諦説を打ち立てたのか、また、なぜ三諦でなくてはならなかったのか等などの問題が究明されている。従来、天台智顛は三諦思想を中国で制作された疑偽經典である『仁王般若経』や『菩薩瓔珞本業経』を根拠とした、といわれているが、それは名称のみで影響を受けていないことを明らかにされた。三諦思想の根拠となったのは、『法華経』方便品の十如是と如来寿量品所説の三諦を根拠としたことを明らかにされ、新知見を提示されたのである。

	〔「方便品」所説の円融三諦〕	〔「如来寿量品」所説の三諦〕
円融三諦	即空 — 是相如 … 是報如 —	諸法皆如 — 如 ————— 空
	即仮 — 如是相 … 如是報 —	諸法不同 — 異 ————— 仮
	即中 — 相如是 … 報如是 —	諸法如是 — 非如非異 — 中
		三諦由来

第三篇の「天台智顛における三諦三観思想の展開」の第一章の「天台智顛の前期時代著書の考察」は、天台智顛の前期時代の諸著作における三諦思想についての究明されている。前期時代においては、いずれの著作も次第隔歴の三諦・三観に留まっていることを明らかにされた。

第二章の「天台智顛の後期時代著作の考察」の第一節の『法華文句』における三諦三観思想では、平井俊栄氏の『法華文句』の成立に関する批判に対して、分科解釈法や四種解釈法は、天台智顛が独自に案出したものであり、吉蔵の影響を受けたものでないことを明らかにされた。『法華文句』に説かれる三諦思想は、真俗中の三諦と空仮中の三諦の形を展開する。とくに、円教では、円融相即一体の三諦説を構成して、空仮中の三つの真実は、即空即仮即中として、三即一・一即三にして無礙自在していて、円融相即一体の三諦が天台が説く三諦の体系であり、この円融三諦が諸法実相・真如法界・実性實際であり、これこそが世間相常住であることを明らかにされ、新知見を提示されたことを評価したい。

第二節は『法華玄義』における三諦三観思想である。『法華玄義』は、「妙法蓮華經」の経題を、円融相即論をもちいて、天台教学を体系化したのである。その中核となるのが、従仮入空観（空観）・従空入仮観（仮観）・中道第一義諦観（中観）の三観である。また、円教における不次第・円融・円頓・一心三観とは、空仮中が一念において即空即仮即中の義を示し、即空即仮即中の観を実修し、即空即仮即中の対象となる煩惱を断滅し、即空即仮即中の階位を証得していくのである、という。一念の心において空仮中の三諦を不即不离・不前不後の関係で把握し実修し円融するので、一空一切空・一仮一切仮・一中一切中であり、一空は一切の空仮中を互具し、一仮は一切の仮空中を具足し、一中は一切の中空仮を具足すると共に、一空一切空・一仮一切仮・一中一切中は、同時に相即・観照し、実修することを即空即仮即中の一心三観である、という。『法華經』を円教すなわち円教妙理（妙法）であるとして、円妙・円満・円足・円頓を意味し、教円・理円・智円・断円・行円・位円・因円・果円の八義を円満具足すれば、一切諸法は、即空即仮即中であり、一色一香無非中道であり、生死即涅槃であり、世間相常住であり、実相常住・実諦常住・仏性常住である、という。すなわち、『法華經』は、円融三諦・一心三観の円教の観点から読み込まれば全ての経文の矛盾も解決されるという、新知見を提示されたことを評価したい。

第三節は『摩訶止観』における三諦三観思想である。『摩訶止観』は『法華經』の実践法を講説したものであり、一心三観を軸として円頓止観を専ら説いていったものである。『摩訶止観』には、十境・十乗観法が説かれている。十境とは、観陰入界境・観煩惱境・観病患境・観業相境・観魔事境・観禅定境・観諸見境・観増上慢境・観二乗境・観菩薩境である。何れも人間の心を支配する自我心である。現実の日常生活の中で起こる心の動きを対境として、それを即空即仮即中と感ずることをいう。十乗観法とは、観不思議境・発真正菩提心・善巧安心止観・破法遍・識通塞・道品調適・対治助開・知次位・能安忍・無法愛であり、この十法は修行者をさとの果に運ぶ乗り物となるからである。従来は、観不思議境が最も重視されたのである。

本論文は、『摩訶止観』の三諦・三観を究明するに当たって、十乗観法の中で「第四の破法遍」が最も重要であるといわれる。「破法遍」は、円教の一心三観を用いて一切所有の執着や随情を遍く破壊するというものである。『摩訶止観』が説く、空仮中の三観の構成内容は、豎の空仮中の破法遍・横の空仮中の破法遍・横豎不二の空仮中の破法遍からなる。こ

の三段の中で、一段でも欠如すれば、円融・円満・円頓・円足の妙の三観とはならない、という新知見を提示されたことを評価したい。

三、審査結果と今後の研究課題

上述のように、トラン・クオック・フォン氏の学位請求論文は、何れの論考も学会において未解明の問題を解明され、種々の新知見も提示され、実に優れた研究成果であるといえることができる。

氏はベトナムからの留学僧であるが、より完全な日本語で執筆され、日本人以上に完成度の高い論文であることを評価したい。研究の方法論や論文の推敲に関しては、常に一貫した処方を用いており、全く問題はない。

しかし、本論文において未解明の問題も残されている。箇条書きにして、今後、究明してもらいたい課題を指摘しておきたい。

(1) 天台智顛の三諦・三観思想は、中国の疑偽經典である『仁王般若經』『菩薩瓔珞本業經』から影響を受けていないと断定されているが、天台教学は、この両經から様々な教学的示唆を受けている。簡単に結論を出すことはできないのではないか。

(2) 天台三大部の『法華文句』『法華玄義』『摩訶止観』相互の三諦・三観思想の関連性や深化の課程の変遷についても究明してもらいたい。

(3) 『摩訶止観』の三諦・三観思想について、十乗観法の破法遍を根拠として究明されていて、間違った方向性ではない。実に大変な課題であるが、できれば十境・十乗観法の一々との関係について究明してもらえれば、天台の三諦・三観と実践法門との関連性がより明確になるであろう。

四、口述試験および語学試験の結果

〔1〕口述試験

まず、予備審査委員会が、11月17日（木）14時～15時15分まで開催された。主査・副査三名が出席し、副査の外部審査委員は文書によって回答され、慎重に審議がなされた。審査の結果、本審査に入ることで了承された。

口述試験は、主査・副査四名の審査委員が参加して、平成29年1月27日（金）13時から14時45分にわたって、それぞれの審査委員が質疑応答が行なわれた。

トラン・クオック・フォン氏は、各審査委員の質疑に対して、的確に回答された。とくに、専門領域に関する質疑については、日頃の研究成果をもとにして、明確に自説を展開され、各審査委員を十分納得させるに足る理論的根拠を明示された。

以上のように、問題点もあり、早急に加筆・訂正することを約束された。

審議の結果、合格と判定された。

平成29年2月6日（月）に開催された文学研究科委員会において、本審査報告がなされ、審議の結果、合格と判定された。

〔2〕語学試験

トラン・クオック・フォン氏は、平成 24 年 5 月 23 日に本学大学院の博士候補者試験に合格している。

五、結論

以上の理由ならびに審査経過に鑑み、トラン・クオック・フォン氏の本論文が、本学の学位規則第 3 条第 2 項に照らし、博士（文学）の学位を授与するに値すると判断し、本学位請求論文を合格と判定した。

本学位申請論文のインターネット上での公開を認める。

平成 29 年 2 月 7 日

主査	愛知学院大学客員教授	大野榮人	㊞
副査	愛知学院大学教授	引田弘道	㊞
副査	愛知学院大学教授	伊藤秀憲	㊞
副査	駒澤大学総長	池田魯参	㊞